

ホームヘルパーの業務に対する楽観的態度の構造

関西女子短期大学 氏名 広瀬美千代 (005275)

ホームヘルパー、楽観的態度、困難の解釈

1. 研究目的

予想以上の独居高齢者や要援護高齢者の増加によりホームヘルパーへのニーズは年々高まる一方である。ホームヘルパーは在宅介護サービスの要ではあるが、感情労働特有の利用者との関係から生じるストレスに加えて処遇の悪さなどが指摘されている。堀田らによれば、利用者の生活の楽しみの中では、家族や友人との付き合いよりヘルパーの訪問の時間と回答したものが最も多かった。このことは、ホームヘルパーが利用者との関係には困難を抱きながらも、利用者が求めていることを理解し、そのニーズに応じていこうという姿勢が必要であることを示唆している。

一方、ホームヘルパーや施設介護職の精神的側面に関する先行研究は、「ストレス」や「バーンアウト」など否定的側面に関するものに集中している。他方で、Seligman が、「ストレスへの癒し」の研究より、困難を乗り越えて成長していくのに必要なやる気や要因に関する研究の必要性を説いている。またメイヤロフはケア全般を行なう者の他者への貢献を通じて促されるケアラー自身の自己実現の可能性を説いていることから困難への対処や困難を経験して得られる利得に関する研究が、家族介護者同様ホームヘルパーに関しても行われることが望ましいと考える。特にポジティブなものの見方や楽観性に関してなどのホームヘルパーの態度に関する研究は非常に少ない。これらのことから本研究ではホームヘルパーが業務上起こりうる事象に対してもつ楽観的な態度である「ホームヘルパー業務楽観的態度」を「介護業務において感じる困難に対して楽観的な解釈をし、人生における意味づけや自己成長と捉えることができる態度」と定義し、これを測定する尺度の因子構造を探索的に検討することを目的とした。

2. 研究の視点および方法

WAM-NET に登録されている A 市内の 600 名のホームヘルパーを対象とする自記式郵送調査を行った。調査期間は 2013 年 5 月 1 日～5 月 31 日までで、有効回収数 149 通、有効回収率は 24.8%となった。これより先に行ったインタビュー調査の結果から、ホームヘルパーが見出している肯定的な評価や価値を見出す姿勢を検討し、ホームヘルパーの楽観的心理を測定する概念として、困難状況に対していかに肯定的認知や解釈ができているのか、また長い業務経験で人生においてどのような意味づけを行っているかなどに関する質問項目の選定を行なった。選定された概念は、各々「困難の楽観的解釈」(7 項目)「人生にお

ける利得感」(5項目)「自己成長感」(3項目)の計15の質問項目に集約された。回答選択肢は「とてもそう思う(4点)」～「まったくそう思わない(1点)」の4段階で、点数が高くなるほど「ヘルパー業務楽観的態度」の得点が高くなるように設定した。質問項目は、高齢者福祉を専門とする研究者のエキスパートレビューを受け、内容を吟味した上で修正を行った。ヘルパー業務楽観的態度の因子構造を明らかにするために、選択した15の質問項目に対し、因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行い、因子を抽出した。抽出された因子の内的整合性を確認するため、クロンバック α 係数を算出した。

3. 倫理的配慮

調査の留意事項として調査時点における依頼文に得られたデータの匿名性、プライバシーの保護、研究目的以外でデータを使用しないこと、得られた結果の学会等へ報告することなどを明記し、調査への同意を得られた場合は無記名で返送を依頼した。本調査票は筆者が所属する大学の倫理委員会の承認を得ている。

4. 研究結果

ホームヘルパーは、女性が83.9%で、平均年齢は46.2±11.1歳であった。所持資格は介護福祉士が43.6%、訪問介護員1級が16.1%、訪問介護員2級が69.8%であった。ヘルパーとしての経験年数は5.9年±4.0で、26.2%の者が非常勤職であった。

選択した15の質問項目に対する探索的因子分析を行った結果、設定した下位概念と同じ3因子から成る15項すべてが抽出された。回転前の累積寄与率は65.1%であった。クロンバック α 係数は、尺度全体が0.855、下位尺度は第1因子「困難の楽観的解釈」が「利用者の態度から不満やストレスがあると感じててもその感情を受け止めることができると思う」、「うまくいかない時は困難ではなく、解決すべき課題ととらえる」などで構成された($\alpha=0.855$)。第2因子「人生における利得感」は「ヘルパーの仕事を経験したことによって、生きていることの意味がわかるようになった」、「ヘルパーの仕事が続けてきたことで、自分自身をよく理解できるようになった」などで構成された($\alpha=0.875$)。第3因子「自己成長感」は「ヘルパーの仕事をするとは、今後の人生のためになると思う」「ヘルパーの仕事をする事で学ぶことがたくさんある」などで構成された($\alpha=0.858$)。

5. 考察

クロンバック α 係数やエキスパートレビュー及び解釈可能な因子分析の結果より、本尺度は途上段階であるが、ホームヘルパーの利用者に対する支援や業務で起こりうる出来事に対して取り組む際の楽観的態度を測定する尺度としては内容妥当性と信頼性を有していると判断した。これは短期的には肯定的な結果を期待していき、長期的には人生の意味に肯定的に変換していくことができる意識を集約した概念である。本研究の結果は単にヘルパー業務の日常で生じる不満やストレスの感覚をいかにマネジメントしていけるのかという次元のみならず、人生におけるヘルパー自身への生き方への問いかけという別の次元での見方ができるか否かという視点を検討する上で一つの資料になると考える。